

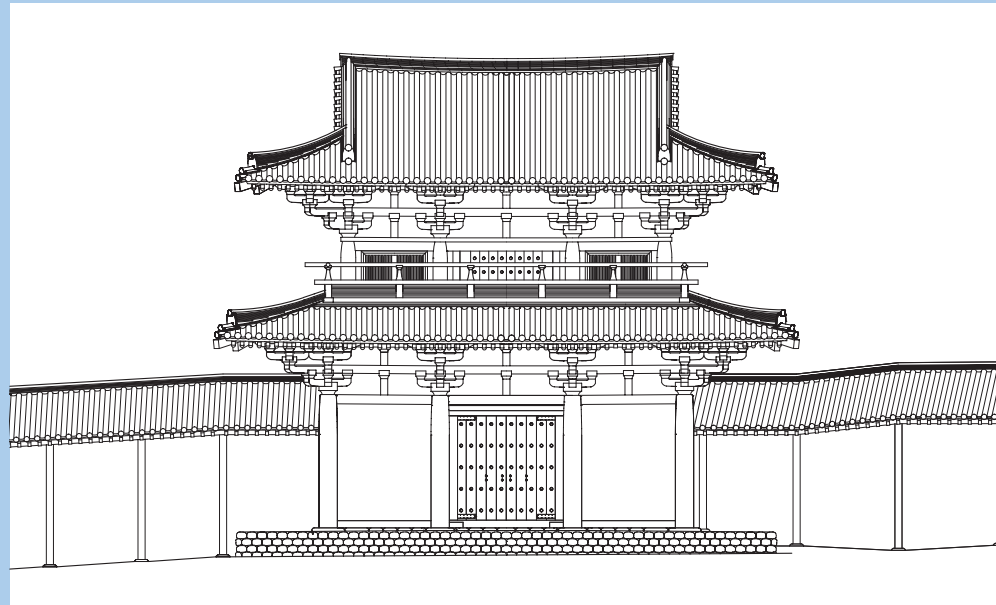
宮城県多賀城跡調査研究所設立50周年記念

多賀城跡

—発掘のあゆみ2020—

宮城県多賀城跡調査研究所設立50周年記念

多賀城跡—発掘のあゆみ—
2020



多賀城跡

—発掘のあゆみ2020—



宮城県多賀城跡調査研究所



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城は奈良・平安時代における陸奥国の国府であり、奈良時代には蝦夷に対する軍事政策を担った鎮守府も置かれており、まさに古代律令国家による東北支配の政治的・軍事的な中心を担っていました。その価値は早くから認められ、大正 11（1922）年に国史跡に指定され、昭和 41（1966）年には特別史跡に昇格しています。昭和 35（1960）年には宮城県、多賀城町、河北文化事業団により設置された「多賀城跡発掘調査委員会」により発掘調査が実施されました。そして昭和 44（1969）年に多賀城跡調査研究所が設立され、それ以降、発掘調査を進めてきており、平成 31（2019）年 4 月に当研究所は設立 50 周年を迎えました。

当研究所は多賀城跡調査研究委員会の助言を受けながら、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施して、多大な成果を挙げてきました。近年の政庁正殿の調査や城内官衙の調査、外郭線の調査では、多賀城の新たな姿が明らかにされています。また、城外の南面に広がる沖積地の調査も進み、方格地割による町並みの展開がよりわかってきました。

多賀城跡については、発掘調査の現地説明会開催、報告書の刊行や各種研究会での調査成果の発表、調査成果に基づく環境整備、史跡公園としての公開・活用などを通して情報公開に努めてきましたが、さらなる発信が必要と感じています。そこで、研究所設立 50 周年を記念しまして、多賀城跡発掘調査 50 周年の節目に刊行した「多賀城跡―発掘のあゆみ 2010―」に近年の調査成果を加え改訂することにいたしました。

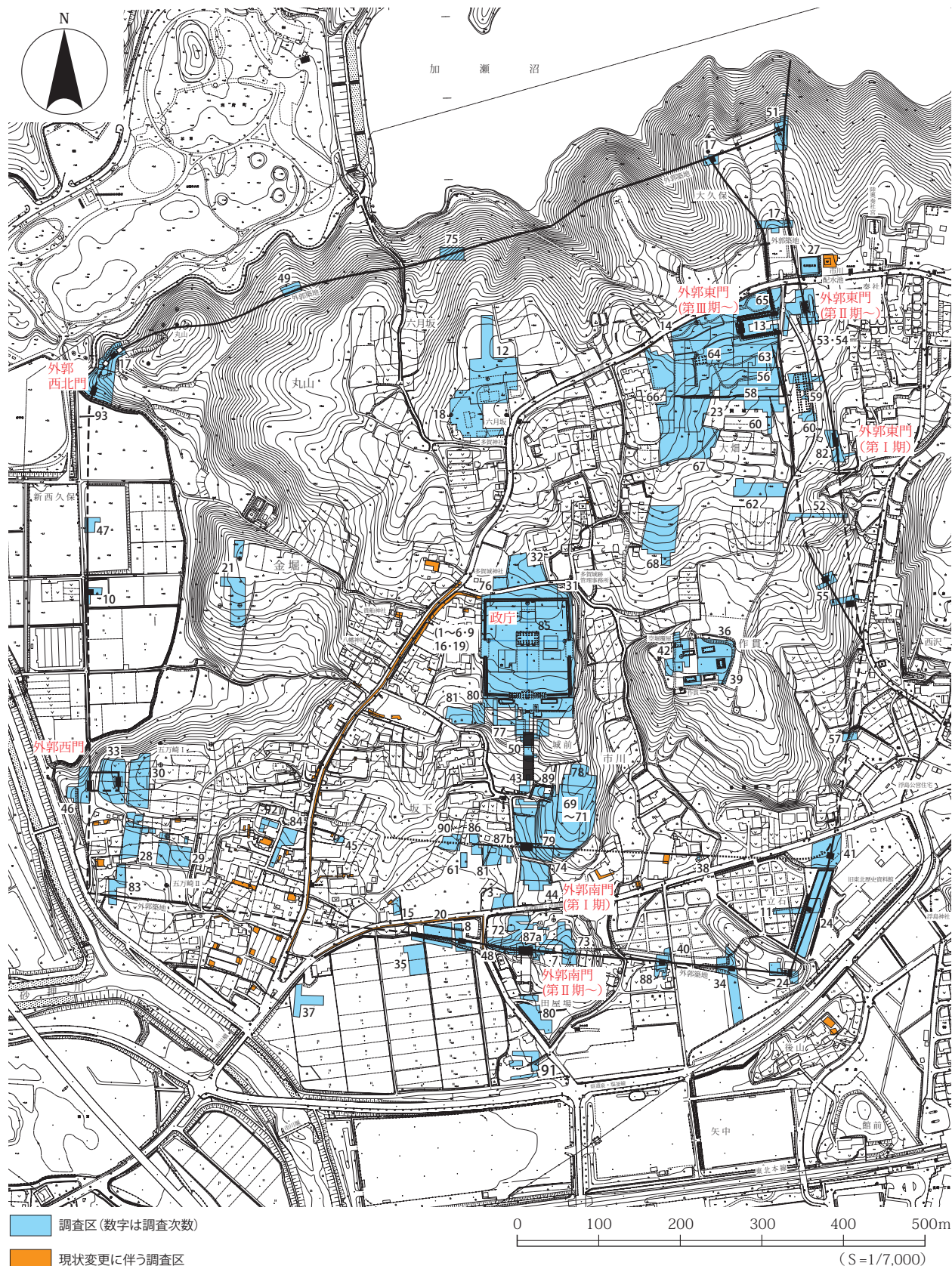
本書では多賀城跡の史跡としての価値と魅力を簡潔にまとめながら紹介していますので、多賀城と東北古代史の理解の一助になれば幸いです。また、多賀城跡をはじめとする古代城柵官衙遺跡にはまだまだ貴重な情報が埋もれており、これらを未来に残していくことも重要な使命と考えています。今後も皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

最後になりますが、研究所設立以来、ご指導、ご助言を頂いてきました多賀城跡調査研究委員会の諸先生方、文化庁・奈良文化財研究所・宮城県・多賀城市をはじめとする関係諸機関、地元の皆様、そして当研究所旧職員の皆様、発掘調査・遺物整理などにあたられた皆様に深く感謝を申し上げます。

また、本書を作成するにあたり、お世話になりました関係機関に対し、心より感謝申し上げます。

令和 2 年 3 月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 高橋 栄一



目次

I はじめに	1	III 多賀城碑	22
1 特別史跡		IV 多賀城廃寺	24
2 発掘調査		V 城外の様子	26
II 多賀城	4	VI 関連遺跡の調査	28
1 場所		参考文献	30
2 創建と変遷			
3 国府多賀城			
4 城内の様子			
5 さまざまな遺物			
6 多賀城での生活			

うるしがみもんじょ



東門・大畑地区



外郭東門復元イメージ図（平安時代）



作貫地区



政庁南面地区



外郭南門周邊



多賀城廢寺跡

1 特別史跡

多賀城跡が歴史的に重要であることは古くから有名であり、多くの学者たちの研究があります。

また、大正 11（1922）年には宮城県第 1 号の国の史跡となり、昭和 41（1966）年には、史跡の中でも特に重要な「特別史跡」に昇格されました。

一方、地元の人々もその重要性を理解し、貴重な文化財である多賀城跡を大事に守ってきました。近年、発掘調査などで様々なことが明らかになり、ますますその重要性が高まっています。現在に生きる私たちは、この貴重な文化財を未来の人々に大切に残していかなければなりません。



発掘前の政庁正殿（1963 年）

正殿は多賀城で最も重要な建物。石碑を建て、柵を巡らすなど地元の人たちによって大切に守られてきた。



多賀城碑覆屋（1875 年）（国立公文書館デジタルアーカイブ）

江戸時代に多賀城碑を保護するために建てられ、明治 8（1875）年に建て替えられた。

2 発掘調査

多賀城跡・多賀城廃寺跡の発掘調査は昭和 36（1961）年から開始され、昭和 44（1969）年からは宮城県多賀城跡調査研究所が継続的に発掘調査を行っています。

調査の成果は現地説明会、研究所年報、インターネットのホームページなどで公開している他、東北歴史博物館で展示・解説されています。

ホームページ URL 《<https://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/>》



政庁東楼の調査風景（1969 年）

研究所設立初年度の調査。地面を丁寧に削り、遺構を見つけ出す。

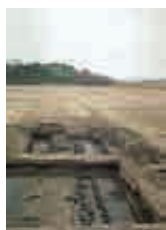


現地説明会（2018 年）

調査の成果を現地で説明し、公開している。



5・6・7次 (年報1969)



7・8・9・10・11次
(年報1970)



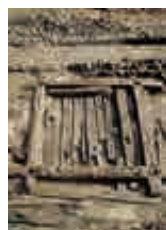
12・13・14次
(年報1971)



15・16・17・18次
(年報1972)



19・20・21・22次
(年報1973)



23・24次 (年報1974)



25・26・27次
(年報1975)



28・29次 (年報1976)



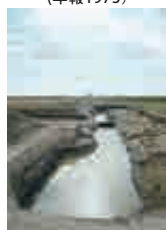
30・31次 (年報1977)



32・33次 (年報1978)



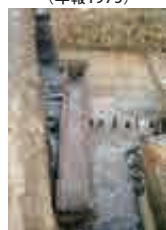
34・35次 (年報1979)



36・37次 (年報1980)



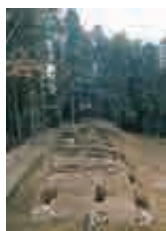
38・39・40次 (年報1981)



41・42次 (年報1982)



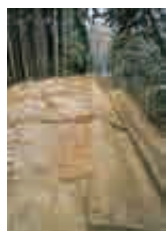
43・44次 (年報1983)



45・46・47次
(年報1984)



46・48・49次
(年報1985)



49・50・51次
(年報1986)



50・52・53次
(年報1987)



54・55次 (年報1988)



56・57次 (年報1989)



58・59次 (年報1990)



60・61次 (年報1991)



62・63次 (年報1992)



64次 (年報1993)



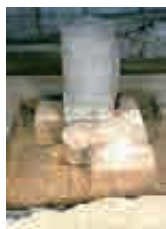
65次 (年報1994)



66次 (年報1995)



67次 (年報1996)



68次 (年報1997)



69次 (年報1998)



70次 (年報1999)



71次 (年報2000)



72次 (年報2001)



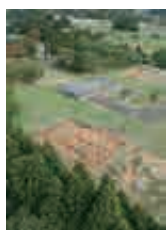
73次 (年報2002)



74・75次 (年報2003)



76次 (年報2004)



77次 (年報2005)



78次 (年報2006)



79次 (年報2007)



80次 (年報2008)



81次 (年報2009)



82次 (年報2010)



83次 (年報2011)



84・85次 (年報2012)



86次 (年報2013)



87次 (年報2014)



88・89次 (年報2015)



90次 (年報2016)



91次 (年報2017)



92次 (年報2018)

研究所年報の表紙
を飾った写真を集
めました。

Ⅱ

多賀城

1 場 所

多賀城は仙台市の北東約 10km、仙台平野を一望の下に見渡せる、多賀城市市川・浮島の丘陵上にあります。いびつな四角形の範囲（東辺約 1050m、南辺約 870m、西辺約 660m、北辺約 780m）を築地塀、材木堀（→ P11）で区画しており、ほぼ中央に政庁（→ P8）があります。

この場所は、すぐそばを七北田川と砂押川が流れ、塩竈の港にも近く、交通の要所でした。



多賀城跡の位置



多賀城跡航空写真（南西から）

2 創建と変遷

多賀城碑（→P22）によれば、^{じん き}神亀元（724）
年に、当時の東北地方の最高責任者である^{おおののあずま}大野東
^{ひと}人によって創建されたとされています。

その後、大きく3回改修されています。1回目は^{ふじわらのあさかり}藤原朝鸞による天平宝字6（762）年の大改修で、
2回目は^{ほう き}宝亀11（780）年に多賀城が焼き討ち*に遭ったための復旧です。3回目は^{じょうがん}貞観11（869）
年の^{む つ}陸奥国大地震*からの復興です。

I・II期は奈良時代、III・IV期は平安時代です。この後、多賀城は11世紀中頃までは存続して
いたようです。この間に、^{かいはいくしよく}灰白色の火山灰*が降り積もっています。

*焼き討ち…宮城県北部の栗原郡の長官であった^{これはりのきみあさまろ}伊治公皆麻呂らが反乱を起こし、多賀城に放火し、物資を略奪した。

*陸奥国大地震…多くの建物が壊れ、津波が多賀城下に押し寄せたと記録されている。

*火山灰…十和田湖（青森・秋田県）を噴源とし、10世紀前葉に降ったと考えられている。

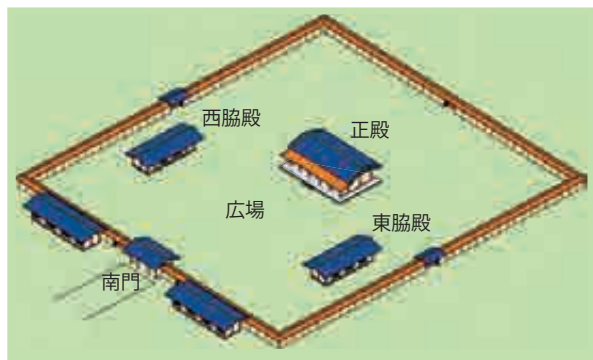
多賀城の変遷

I期：創建（724）～大改修（762） II期：大改修～火事（780） III期：火事の復旧・整備～地震（869） IV期：地震の復興～11世紀中頃

神亀元(724)年

下伊場野窯跡群・木戸窯跡群・日の出山窯跡群（→P28）などで瓦が焼かれる

この頃東山官衙遺跡（→P29）造営



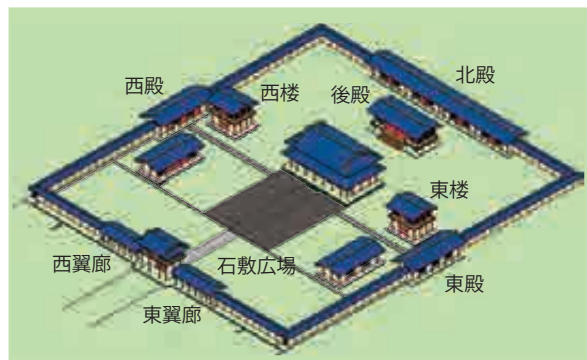
I期政庁 大野東人によって創建された。主要な建物には瓦が葺かれていた。

天平宝字6(762)年

多賀城碑 城前地区の役所（→P13）がつくられる

桃生城完成（759年）（→P29）

伊治城完成（767年）（→P29）



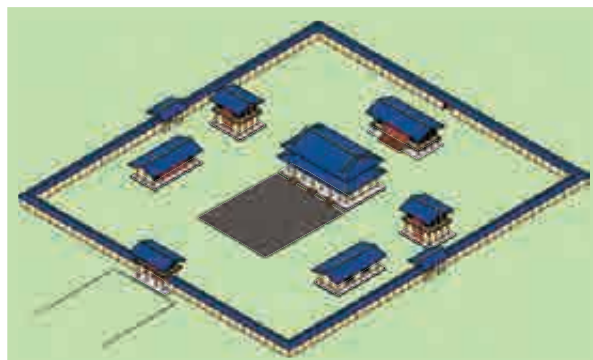
II期政庁 藤原朝鸞によって大改修された。建物や築地塀は礎石式となり、新たに東・西楼、後殿などが加えられた。築地塀は瓦葺き、広場は石敷きとなり、石組み排水溝が敷設されるなど、全期を通して最も機能性と装飾性を兼ね備えていた。

宝亀11(780)年

暫定的な復旧 本格的な再建

城内の整備(大畑・作貴・城前・六月坂地区の役所)（→P13）

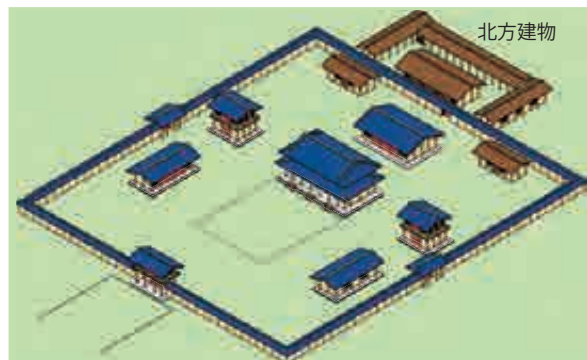
城外に町並みができる（→P26・27）



III期政庁 伊治公皆麻呂の焼き討ち後に再建された。

貞観11(869)年

火山灰降る（915年）



IV期政庁 陸奥国大地震後に復興された。政庁北側に新たに建物が建てられた。

政庁変遷イメージ図

3

国府多賀城

多賀城は、奈良・平安時代の陸奥国^{こくふ}*の国府で、
長官は出羽国^{でわ}*をも管轄していました。また、奈良
時代には鎮守府^{ちんじゅふ}も置かれていました。

国府は、それぞれの国（現在の都道府県にあたる）に置かれた行政組織で、行政、司法、軍事、
宗教などにかかわるさまざまな仕事をしていました。

鎮守府は兵士などを指揮監督する役所で、軍事を担当していました。奈良時代には多賀城に設置
されていましたが、平安時代初めに胆沢城（岩手県奥州市）に移転したと考えられています。

このように、多賀城は東北地方の行政や軍事の中心地だったと考えられます。

*陸奥国…奈良時代は現在の宮城・福島県にあたり、平安時代には岩手県の南半部も含む。

*出羽国…現在の山形・秋田県。

秋田城跡

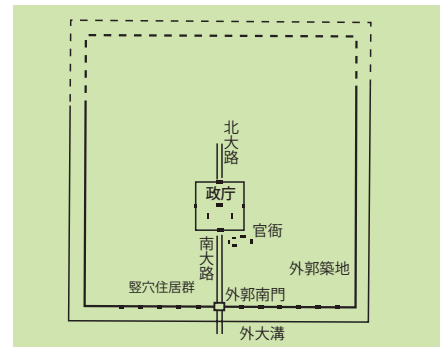
天平5（733）年に完成した出羽国最北の城柵。築地堀（のちに材木堀）で周
囲を区画し、ほぼ中央に政庁がある。

写真は復元されたトイレ遺構で、鶏ノ木地区の迎賓施設
には渤海使が使用した水洗トイレがあった。



（写真提供 秋田市教育委員会）

律令政府の支配地域
9世紀前半
8世紀後半

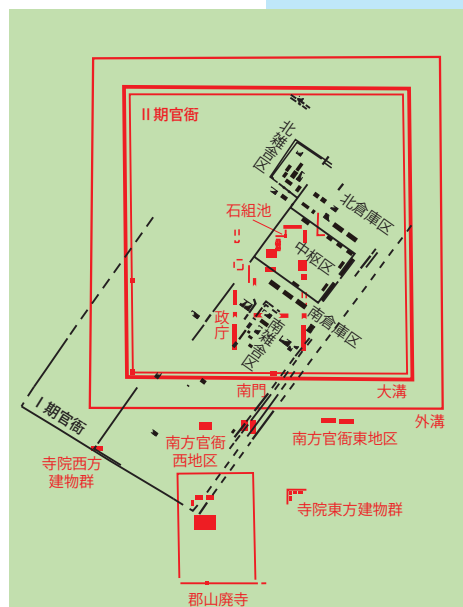


志波城跡

（写真提供 盛岡市教育委員会）

築地堀と大溝で周囲を区画し、内
部に政庁がある。延暦22（803）年
に、坂上田村麻呂によって造営さ
れた。

写真は外郭南門と築地堀で、門は
二階で兵士が警護できるように復
元されている。



郡山遺跡II期官衙

（写真提供 仙台市教育委員会）

多賀城が成立するまでの陸奥国府。材木堀と
大溝で周囲を区画し、内部に建物を配置して
いる。石組池はエミシの服属儀礼に用いられたと
する意見がある。



多賀城と主要な城柵・官衙遺跡

律令政府は城柵や官衙（役所）を
つくりながら、支配地を北へ広げ
ていった。

当時の国家は律令（^{りつりょう}律は刑法、令は民法と行政法）と呼ばれた法律を基礎とした統治をしており、東北地方北部には律令政府にしたがわない人々が住んでいました。政府側では彼らをエミシと呼び、その支配の拠点として、各地に城柵が造られました。宮城県内には桃生城や伊治城（→ P29）などが造られています。

多賀城は城柵でもあり、各地の城柵も管轄しておりました。

政府とエミシの間ではたびたび武力衝突が起きました。特に奈良時代後半から平安時代初めにかけての衝突*は長期間にわたり、大規模でした。

*衝突…政府側の責任者は坂上田村麻呂で、エミシ側の中心人物は^{さかのうえのたむらもろ}大墓公阿弼流為（アテルイ）。



桃生城政庁正殿

建物の雨落溝には多量の焼け土と炭が落ち込んでおり、建物が火災に遭ったことを示している。



兵士が使った武器 上は刀、下は弓の一部、右は鉄製の矢。



政府とエミシの武力衝突



伊治城跡出土の土器と武器（栗原市教育委員会 蔵）
竪穴住居からまとめて見つかったもの。



ど
弩の発射装置

（栗原市教育委員会 蔵 宮城県指定有形文化財）
弩は発射台と装置を持つ弓のことで、飛距離・貫通力に優れ、命中率が高い。西欧ではクロスボウ(ボウガン)と呼ばれる。日本で初めて伊治城跡で発見された。



弩を構えた兵士

4 城内の様子

A 政 庁

政庁は多賀城内で最も重要な場所で、大事な政務や儀式が行われました。

多賀城のほぼ中央にあり、東西 103m、南北 116m の長方形に築地塀^{せいでん}を巡らせ、内部に正殿^{せいでん}、脇殿^{わきでん}、後殿^{こうでん}、楼^{ろう}などを計画的に配置しています（→ P5）。政庁の造営にあたっては、大規模な土地の造成が行われていました。



政庁跡航空写真 築地塀で囲まれたなかに、正殿や脇殿などがある。



正殿

政庁の中央やや北寄りにある。各期を通じて位置は変わらない。高い基壇（土を突き固めた基礎の土壇）上に建てられており、階段がつけられていた。

石組みの階段



後殿

正殿の後方にある。Ⅱ期に設けられ、ほぼ正殿と中心軸を合わせて造られている。3箇所に礎石が残る。

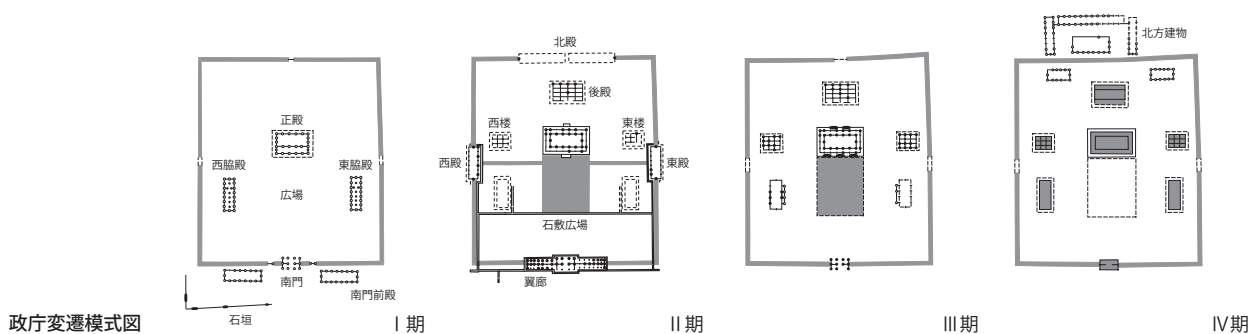
北東隅の礎石



西脇殿 正殿の西前方にある。正殿と同様に各期を通じて位置は変わらない。



東楼 正殿の東方にあり、Ⅱ期に設けられている。



政庁の各建物は、Ⅰ期は掘立式^{ほったて}*ですが、Ⅱ期以降は礎石式^{そせき}*となり、主要な建物には瓦が葺かれていました。Ⅱ期の建物は火事に遭っています。

正殿は二階建てを思わせる立派な建物で、東西両側に脇殿が配置され、これらの建物に囲まれた空間は、広場として重要な儀式の場となりました。Ⅱ期には広場が石敷きになっています。

政庁からはたくさんの瓦(→P14)を始め、土器(→P15)や硯(→P16)なども発見されています。土器は茶碗型のものが大部分で、儀式に使われたものです。一方、硯は政庁で事務も行われたことを示しています。

*掘立式…地面に直接穴(柱穴)を掘り、柱を立てて建築する方法。

*礎石式…礎石を据え、その上に柱を立てて建築する方法。^{きたん}基壇上に建てられる場合が多い。



塼
レンガのように、積んだり敷き詰めたりして用いられた。鹿が浮き彫りになっている。



焼瓦屑
伊治公弼麻呂の反乱による火事の跡。焼けた土と多量の瓦が堆積している。



築地堀
西辺築地堀と内側の石組み排水溝。手前の石はⅡ期の建物の礎石。



政庁南面の石垣
政庁の南西部では大規模な盛土造成が行われており、その南端と西端は石垣で土留めされていた(写真奥が政庁南辺築地堀)。

政庁南門
政庁の正門で、各期を通して同じ場所にある。

B 外郭の門と区画施設

多賀城の周囲は堀でいびつな四角形に囲まれており、南・東・西には門が開かれていました（北門は未発見）。

(1) 南 門

I期の南門は、政庁から南へ約190mの位置に建てられた掘立式の八脚門^{はつきやくもん}*です。II期になると、さらに南方120mの位置で礎石式の八脚門に建て替えられました。いずれも南辺のほぼ中央に位置する、多賀城の威厳を示す象徴的な門であり、政庁と直線的な道路（→P12）でつながっていました。

*八脚門…前後4本ずつ8本の柱で軒を支える構造の門。大きな寺院や役所などにあり格式が高い。



外郭南門
削平が著しいが、礎石を安定させるための石（根石）が残っている。

(2) 東門と西門

両者とも礎石式あるいは掘立式の八脚門で、時期によって場所を変えています。

東門は、I期には東辺の中央部に掘立式の八脚門と、その北方約160mの所に棟門^{むなもん}がつけられます。II期になると中央部の八脚門がなくなり、北方の棟門が礎石式の八脚門に建て替えられます。III・IV期には約80m内側に入り込んだ場所に移動します。

西門は西辺の南寄りにあり、東門と同様にIII期には内側に入り込んだ場所に移動します。I期の姿はよくわかっていません。また、近年、IV期になると西辺の北端部に西北門がつけられたことがわかりました。



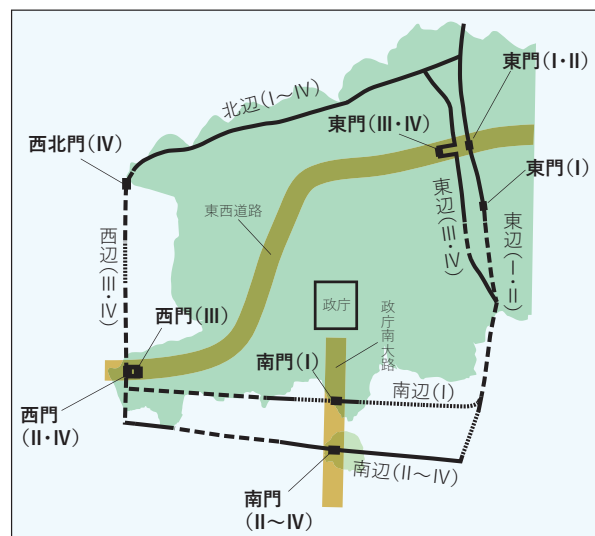
外郭東門
左側の石がII期の門の礎石。石組の雨落溝が巡る。右側のやや盛り上がった部分がIII期の築地堀で、II期の門を覆っている。



外郭東門
III期の掘立式の門とIV期の礎石式の門。



外郭西門
掘立式と礎石式の門がある。



外郭の門と区画施設

南辺はII期になると南へ約120m移動した。東辺はIII期になると北半部は西へ約80m移動した。
I・II期の西辺と西門の様子はよくわかっていない。

(3) 築地塀と材木塀

多賀城を区画する施設は築地塀^{ついでい}と材木塀^{ざいもくべい}です。

築地塀は土を突き固めて高く積み上げ、屋根をかけた土塀で、高さは4～5m程あります。材木塀は材木を密接して立て並べた塀です。地盤の良いところでは築地塀を、低湿地では材木塀を築いていたようですが、南辺だけは低湿地であっても大規模な基礎工事をを行い、築地塀が築かれていました。

築地塀は当時「大垣」と呼ばれていました。南辺築地塀のそばから「大垣」と書かれた土器が見つかり、多賀城でも同様に呼ばれていたことがわかりました。

なお、築地塀や材木塀の各所には計画的に櫓^{やぐら}が取付けられていました。



外郭南辺築地塀

外郭南門の東側(手前)と西側(奥)。築地塀が切れるところが外郭南門があった位置。



外郭南辺の排水施設 築地下の排水暗渠には、ケヤキ材を刳り貫いた木樋^{もくひ}が用いられている。



塀の基礎工事 低湿地では、沈下防止のために丸太材を筏状に組み合わせた塀の基礎工事が行われている。



「大垣」墨書土器

須恵器^{すゑき}の坏(お椀)の底部に書いてある。



築地塀断面

土を何層にも突き固めている。



材木塀

西辺中央部。平安時代につくられ、外側に溝が掘られている。



外郭南辺築地塀(東部)

手前の柱穴は築地に取り付く櫓^{やぐら}の基礎の土留めに石垣が積まれている。



外郭北辺築地塀基礎の石垣

基礎の土留めに石垣が積まれている。



外郭南辺築地塀と櫓

櫓は掘立式のものと礎石式のものがみつがっている。

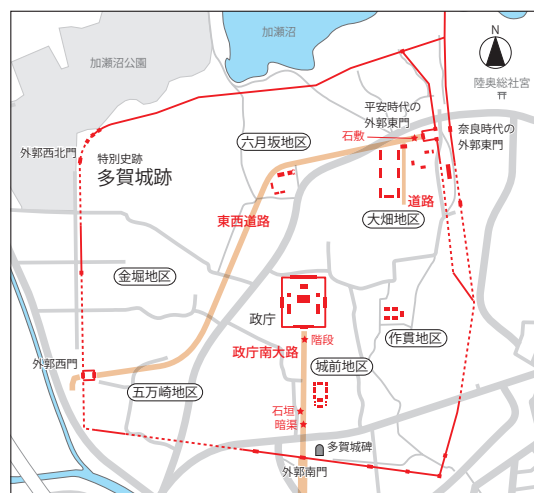
C 道 路

政庁南大路、東西道路、大畑地区の道路が見つかっています。^{おおはた}

政庁南大路は政庁と南門をつなぐメインストリートで、Ⅰ・Ⅱ期は幅13m程、Ⅲ期以降は23m程で、高い部分を削り、低い部分に盛土して直線的につくられています。政庁南門の前の傾斜がきついところは階段となっていました。また、低い部分には土留めの石垣や排水のための側溝・暗渠が設けられていました。

東西道路は、政庁の北側を通る尾根上につくられた道路で、東門と西門をつなぎます。

大畑地区の道路は、大畑地区の役所（→P13）内の道路で、東西道路との交差点には門がつくられています。



城内の道路



政庁下の階段
玉石を並べてつくっている。1ページに復元整備された階段が写っている。



道路につくられた暗渠排水施設
政庁南大路の東側の丘陵から西側の低湿地へ排水するために道路下に設けられたⅠ期の暗渠と集水樹。



東門付近の道路舗装
東門から城内へ入ったすぐの場所には、石や瓦の破片を敷き詰めた舗装路面が残る。斜面下方にあたる道路の南側には排水のための側溝が付く。



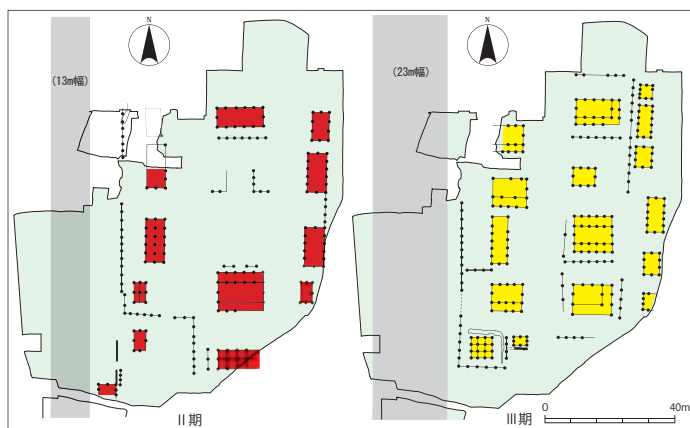
政庁南大路西端の石垣
長さ80cm前後の割石と自然石を縦・横の目地が通るように積み上げ、隙間に小石を詰めたもので、見栄えが意識されている。

D 城内の役所

城内には、儀式の場である政庁の他に、実際に事務をする役所が、大畑地区、城前地区、作貫地区、^{ろくがつざか}六月坂地区、^{かなほり}金堀地区、^{ごまんざき}五万崎地区などに設置されていました。大部分がⅢ期以降に成立しており、この頃に体制が整備されたことがわかります。

(1) 城前地区

政庁の南で、メインストリートの東側にある役所で、Ⅱ期には^{ちんじゅふ}鎮守府に関わる仕事をしていたとみています。伊治公^{いじこう}告麻呂の反乱で火事に遭い、Ⅲ期に再建されています。

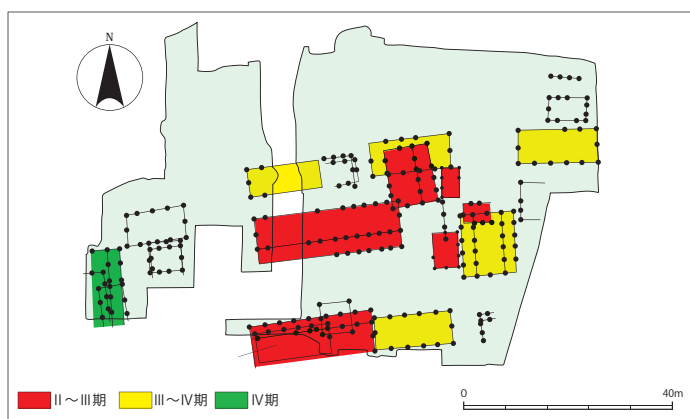


城前地区建物配置模式図

Ⅱ期の役所は伊治公^{いじこう}告麻呂の乱によって焼けている。Ⅲ期にはほぼ同位置で建て替えられており、建物が増えて実務性が強まる。

(2) 作貫地区

政庁から沢を隔てた東の丘陵上にあります。Ⅲ期になると、5棟の建物が政庁に向けて「コ」字形に配置されます。



作貫地区建物配置模式図(Ⅲ～Ⅳ期)

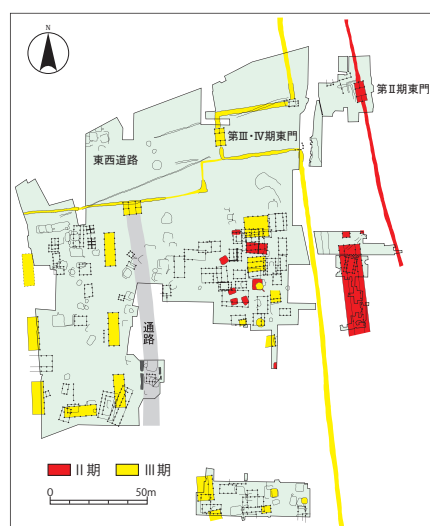
主屋と南・北各2棟の副屋は同位置で2度建て替えられている。

(3) 六月坂地区

政庁の北方、東西道路に面するところでⅢ期につくられた役所です。2棟の四面廂付建物が置かれる格式の高い一画でした。Ⅳ期には城内では唯一見つかった礎石式の倉庫が建てられます。

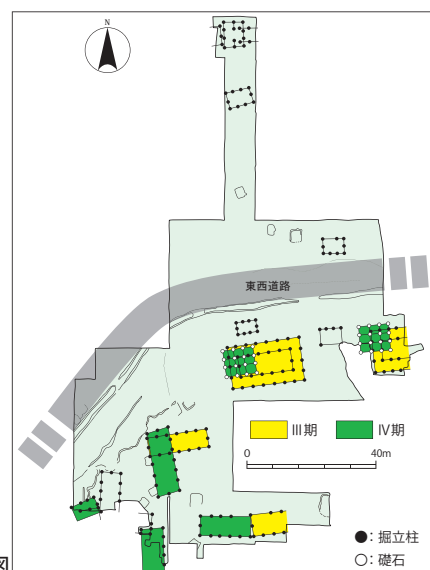
(4) 大畑地区

外郭の東門を入ったところにあります。材木堀で囲われた役所がⅢ期(9世紀前半頃)につくられます。中央には道路があり、東西に二分割されています。西側には7棟の建物が「コ」字形に配置されています。東側からは米に関する木簡が見つかっており、米の受給に関する仕事をしていたようです。また、多数の^{たてあな}竪穴住居や^{かじこうぼう}鍛冶工房が見つかっています。



大畑地区建物配置模式図

西側は建物が整然と配置されている。



六月坂地区
建物配置模式図

●: 掘立柱
○: 礎石

5

さまざまな遺物

げ た
下駄・容器・柄) などもあります。

A 瓦

当時は寺院や役所の中の特に重要な建物は瓦葺きでした。一般の建物や住居などは板や草で屋根を葺いていました。

長方形をした^{ひら}平瓦と、筒を半分に割った形の丸瓦とがあり、組み合わせて屋根に葺きます。軒先にでる瓦には飾りがつけられており、製作者や時代によって模様が違います。

I期の瓦は遠く離れた宮城県大崎市周辺で、II期以降は多賀城の近くでつくられています。これらの瓦には地名*や人名が書かれたものがあり、多数の人が瓦造りに動員されました。



□ 郡仲村郷他辺里長
二百長丈部些人

郷里制文字瓦(木戸窯跡群 東北大学 蔵)
多賀城の造営年代が郷里制施行期間(717
~740年)であることを示す瓦。



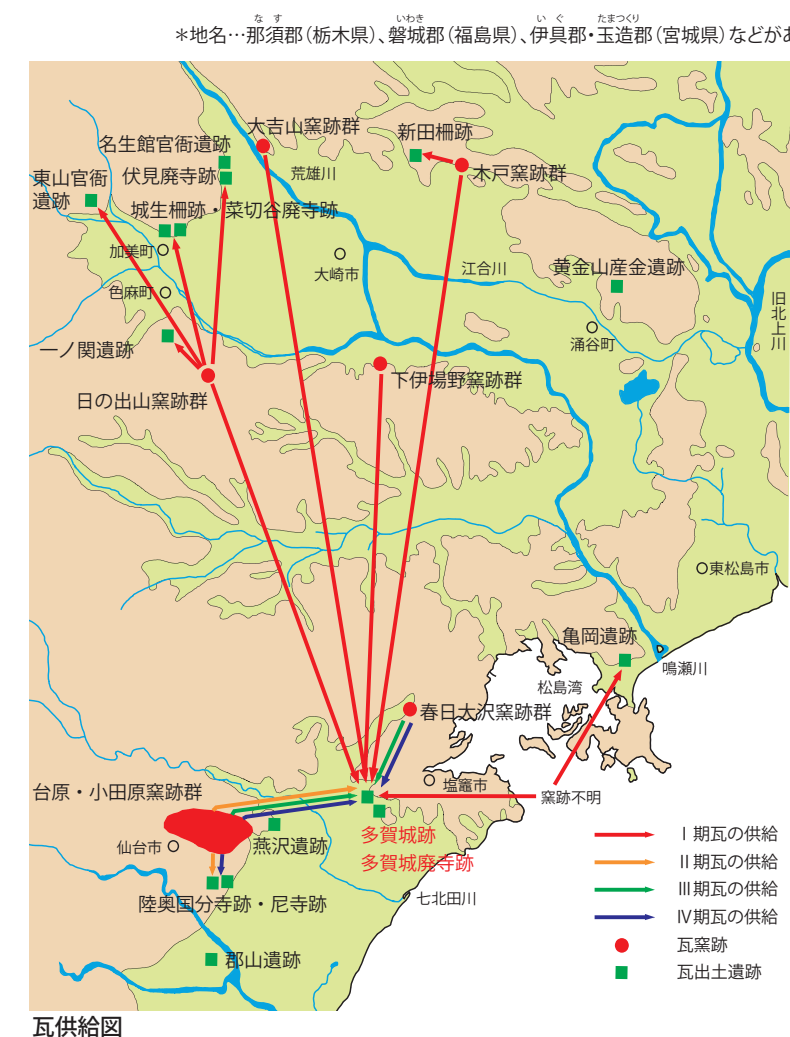
I期の瓦



II期の瓦



II期の瓦



III期の瓦



IV期の瓦

B 土 器

土師器^{はじき}*や須恵器^{すえき}* (→ P11) が多く使われており、茶碗や皿などの食器と、鍋や釜などの煮炊き具、水や酒などを入れておく容器とがあります。他に、一般の人はほとんど使わない灰釉陶器^{かいゆう}・緑釉陶器^{りよくゆう}*や磁器 (→ P21・27) などの高級なものがありました。

これらは形や作られ方が少しずつ変化しており、作られた年代がわかります。

*土師器…窯を使わないで焼いた土器。黄色や赤っぽい色をしている。食器や煮炊き具が多い。

*須恵器…窯で焼いた土器。灰色や青っぽい色をしており、堅い。食器や容器が多い。

*灰釉陶器・緑釉陶器…釉薬^{ゆうやく}(製品を堅くし、水分の吸収を抑えるための溶液)をかけて灰色や緑色に窯で焼いた土器。主に近畿・東海地方でつくられた。



I～II期の土器 山王遺跡八幡地区。^{はちまん}



緑釉陶器 内側に花の模様が彫られている。



青磁 中国産の高級品。



III期の土器 山王遺跡八幡地区。



白磁 中国産の高級品。



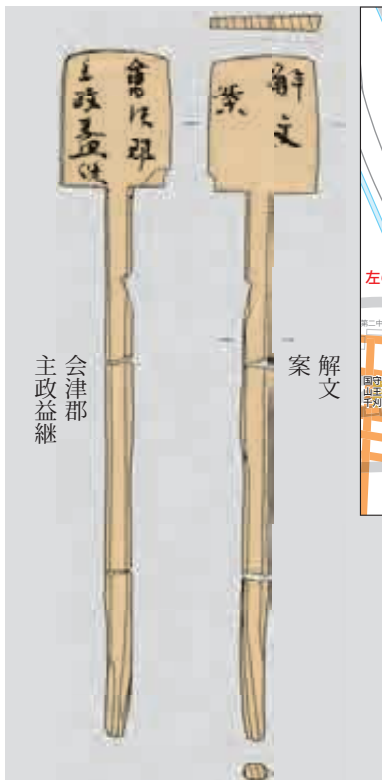
IV期の土器 左は五万崎地区、右は大畑地区。いずれも穴にまとめて捨てられていた。

C 文房具

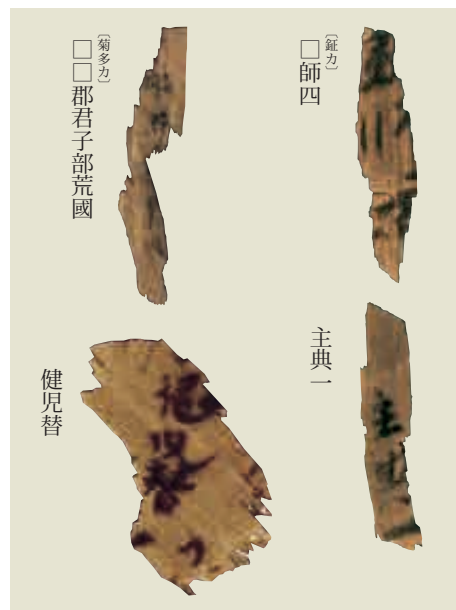
硯、紙（漆紙→P17・19）、木札（木簡→P17・19）、ナイフなどが見つかっています。未発見ですが、筆や墨も当然あったでしょう。こういったものは役人の必需品でした（→P18）。

硯は現在とは違って焼き物（主に須恵器）でできており、墨をする部分が丸いもの（円面硯）と四角いもの（風字硯）、須恵器や瓦を転用したもの（転用硯）があります。

紙と木札は事務の内容によって使い分けられていました。紙にはかさばらないので保管がしやすいことや、貼り合わせると多くの文字が記入できるというメリットがあります。木札には、不要になった文字を削り取れば何度でも使えるというメリットがあります。ナイフはこの削り取りに使われました。

だいせんじく
題箋軸

山王遺跡伏石地区。紙の文書を軸に巻き付けて巻物にし、上部に文書の内容を書き、整理・保管したもの。多賀城外の町並みに会津郡の出張所があり、役人が文書整理をしていたことを示している。



木簡(削り屑)(宮城県指定有形文化財)

ナイフ（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）



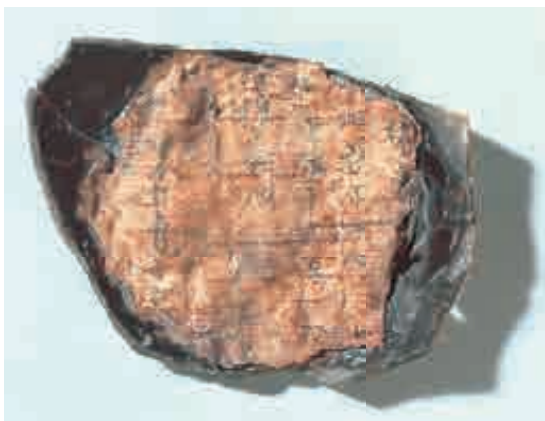
手前2点が風字硯で、
他は円面硯。いずれ
も須恵器と同じよう
に窯で焼かれている。

D 漆紙と木簡

漆紙とは、漆作業の際に、漆液が乾かないように不要になった紙（文書）を蓋として再利用した結果、しみ込んだ漆のおかげで紙が腐らずに残ったもので、日本で最初に多賀城跡で見つかりました。

内容は、計帳（^{けいちょう}世帯主と家族の個人データで、課税台帳）、暦、物品の納入・請求文書、書物などです（→P19・21）。

木簡は、文字や絵が書かれた木札で、荷札やまじないの呪文、個人データが書かれたもの、文字を練習したものや削り屑などがあります（→P16・19～21）



漆紙（宮城県指定有形文化財）最初に発見された漆紙文書。課税台帳で、個人名と年齢が書いてある。

丈部大麻呂 ^{（升乙）}年□九左頼黒子
陽日郷川台里
（他に『丈部』などの習書がある）



木簡（宮城県指定有形文化財）
^{はせつかべのおおまろ}丈部大麻呂の個人データが書かれている。ほかに、「丈部」や「鳥」などの文字を練習している。

黒万呂姉占マ麻賣
弟万呂母占マ小富賣
戸主同族□

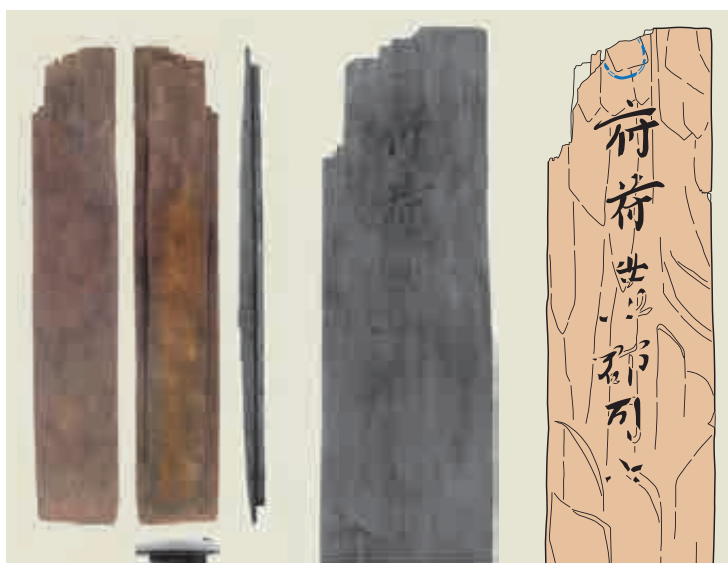


木簡
（宮城県指定有形文化財）
個人名を列記した帳簿類。



^{たかつき}習書のある高坏
木製の高坏の脚部に「執」や「天」などの文字を練習している。

この2点の木簡は政庁南大路につくられた暗渠から見つかっている。暗渠からは、ほかにも木簡や多数の削り屑が出土しており、内容は兵士に関係するものが多い。



（記号）府符□郡司□
^{（諸乙）}

木簡
城前地区出土。鎮守府関係の文書函。

6 多賀城での生活

A 働く

役人や兵士を始めさまざまな雑用をする人々が多数集まっていました。

上級役人は、長官を始め都から派遣されてきた人々で、20人程いました。兵士は500人が常駐しており、指揮する指導者も20人程いました。雑用をする人々は当時の規定から700人程と推定されています。文書作成、鍛冶、漆作業（→P17）、木工、物品の納入や管理、給食などさまざまな仕事をしていました。勤務時間は夜明けから正午までで、その後は自由時間でした。



役人の勤務状況
机に向って木簡を削り直している。後ろの棚には題箋軸に巻いた巻物の文書がある。



兵士の勤務状況
門の付近をパトロールしている。

鍛冶遺物と鉄製品

後列左から溶かした鉄や銅を入れる坩堝、鉄かす、炉に空気を送る羽口の吸気部、前列左は金属製品を研ぐ砥石、右は鉄製の鎌の刃。



B 住む

兵士や雑用をする人々は竪穴住居*に住んでいました。役人は城外で身分に応じた広さの宅地をもらい、数棟の掘立式の住宅や倉庫を建てて住んでいました（→P26）。

*竪穴住居…地面に四角い穴を掘り、屋根をかけた家。農民など当時の一般の人々もこのような家に住んでいた。



竪穴住居復元図

竪穴住居

大畑地区。蕨手刀、小刀、鎌（やじり）などが出土したことから兵士の宿舎と考えられる。



漆作業



漆作業用品 手前左から漆を塗るときのパレット、刷毛、漆を漉した布、後ろは漆容器。パレットや容器の蓋として紙が使われた。



トイレ遺構

金堀地区。水洗式トイレの便槽と考えられる。

C 学 ぶ

多賀城には「国学」と呼ばれる学校があり、「国博士」「国医師」（教師）が学生に授業*をしていたと推定されています。

役人は、文字の正確さや上手さが勤務成績に影響するので、木簡などに文字の練習（習書→P17）をしていました。

杜家立成雑書要略一卷雪寒呼知故酒飲書

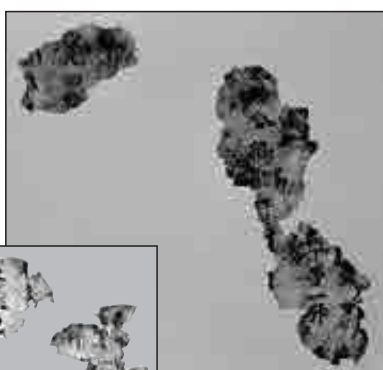


「杜家立成」木簡
市川橋遺跡館前地区。
『杜家立成雑書要略』
は中国から伝わった
手紙の書き方の本で、
木簡の文字はこの本
を手本として、1字ず
つ丁寧に書かれている。

（別筆）
□□財財在在観観世世音我我我聞聞
（別筆）
□□大万佐□□大徳□□乍□



「観世音」木簡
（宮城県指定有形文化財）
お経の一部を練習したもの。



「医方書」漆紙
生薬の名前と調合法が
書かれている。国医師
が医学の授業に使った
教科書である。



「孝経」漆紙
山王遺跡多賀前地区。孝
経を書き写したもの。孝
経は中国の書物で、役人
の必須の教養書。

D 食べる

食事は朝夕2回で、役人は給食制でした。城内の役所には「厨」と呼ばれた給食センターがありました。料理の種類や品数は身分によって違っていました。

米や豆、野菜、魚、海藻、塩、しょうゆ、みそなどが各地から運び込まれたことでしょう。

また、牛や馬、鹿の骨が多量に見つかります。これらの肉は食用に、皮や骨、角は道具に加工されました。

* 授業…「国学」は国ごとに設けられた地方教育機関。国博士は中国の古典である「論語」「孝経」などの一般教養を、国医師は医学を教えていた。なお、生徒は郡司（郡の役人）の子供に限られていた。

武蔵国播磨郡米五斗
部領使□□刑部古□□



木簡（宮城県指定有形文化財）
「武蔵国播磨郡（現在の埼玉県深谷市付近）」から多賀城に米を運んだときの木簡。



国府厨印（鼻節神社 蔵）
国府の厨（給食を管理する役所）が使用した印。



カマド
多賀城廃寺跡から出土した土製の移動式カマド。



食事
当時の食卓にあがったものを復元。ごはんは玄米で、メインディッシュはイワシである。

E 願 う

健康や安全を願ったり、病気や不幸、災害から逃れるための祈りやまじないが行われました。土器や木簡、かたしろ*などに願いや祈りを込めて川に流していました。

役所や邸宅、建物を建てる時には地鎮祭が行われました。土器にいろいろなものを入れ、穴に埋めています。

占いもたびたび行われ、占いに使われた骨が見つっています。

※かたしろ…本物の身代わりに薄い板でつくったもので、人形・馬形・鳥形などが見つっている。



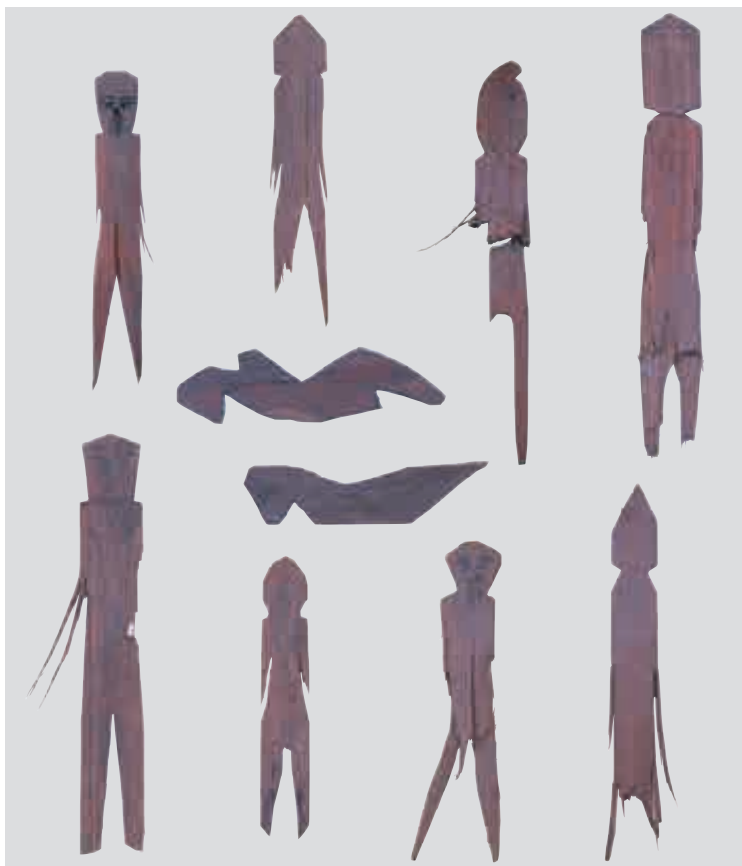
地鎮の土器

大畑地区。甕の口に小皿を12枚重ねて載せ、穴の中に埋められていた。甕の中には小石が6個入っていた。



人面墨書土器

山王遺跡多賀前地区。病気などの原因となったけがれを土器に封じ込めて水に流したものの。



人と馬のかたしろ（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）市川橋遺跡。中央の2つが馬である。



占いに使った骨

山王遺跡多賀前地区。牛や馬の骨を削り、そこを焼いて吉凶を占ったもの。



墨書須恵器 山王遺跡多賀前地区。病気が治ることを祈って、水に流したものの。

F 集・散

多賀城には各地から人や物資が集まったり、逆に各地へ発送したりしていました。

上級の役人は都（奈良・京都）から派遣され、陸奥国内でも会津郡の役人（福島県）が出張してきたりしました。兵士や雑用をする人々は関東地方や陸奥国各地から集められました。一方、中央へ出てさまざまな仕事に従事し、なかには異例の出世をした人*もいます。

食料や日用品、武器などは関東地方や陸奥国各地から送られてきました（→P19）。また、中国産の高級な磁器や、近畿・東海地方で焼かれた土器（→P15・27）も運ばれてきています。陸奥国からは馬や金*、漆などが送られています。

*道嶋嶋足…牡鹿郡(宮城県東松島市周辺)の豪族の一族で、武人として出世し、相模国(神奈川県)、播磨国(兵庫県)や下総国(千葉県)の長官になった。

当時は、国の長官などは中央の貴族出身者が大部分であった。

*金…宮城県涌谷町で産出した金は東大寺(奈良県)の大仏のメッキに使われた。



「敬福」漆紙(多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵)

山王遺跡八幡地区。百済王敬福は当時の陸奥国次官。後に長官となり、涌谷町産の金を奈良に送り、その功績により飛躍的に出世した。百済は朝鮮半島にあった国で、敬福はその王族の子孫。



黄釉褐彩水注・白磁

山王遺跡多賀前地区。中国産の高級な焼き物。中国から直接多賀城へ運ばれたのではなく、大宰府や都を経由して持ち込まれた。

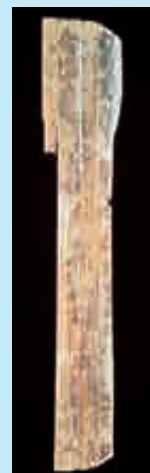


緑釉陶器香炉蓋・灰釉陶器小瓶

東海地方で焼かれた高級な焼き物。



「右大臣」木簡(多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵)
山王遺跡千刈田地区。表裏とも「右大臣殿 錢馬収文」と書かれている。陸奥国から京都にいる右大臣へ馬を献上した文書の題箋軸。



「白河団」木簡
(宮城県指定有形文化財)
白河軍団(福島県)から弓の射手を送り届けた木簡。裏には射手の個人データが書いてある。

人と物の移動 遺物や文献から確認できるものを図示。陸奥国北部からは昆布や海獣皮などが多賀城にもたらされ、都へ送られた。また、武蔵国、信濃国、讃岐国では東北地方の土器が出土している。

III

多賀城碑

外郭南門を城内に入っすぐのところにあり、「壺碑^{つぼのひ}*」とも呼ばれ、日本三古碑^{おおいや}*の一つに数えられています。覆屋を建てるなど地元の人々によって大切に保護されてきました（→P2）。

従来偽物説がありましたが、近年の研究や調査の結果本物であることが確定し、平成 10（1998）年に国の重要文化財に指定されました。

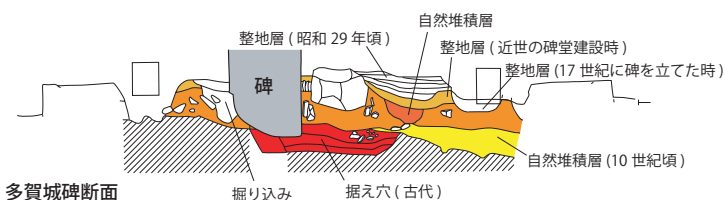
内容は、多賀城が神亀元（724）年に大野東人（→P5）によって造られたことや、天平宝字 6（762）年に藤原朝鸞によって修復されたことなどで、多賀城修造の記念碑です。他の文献にはない貴重な情報を伝えています。

多賀城碑データ

石材：アルコース砂岩
高さ：2.48m
幅：1.03m
厚さ：0.72m
重さ：2,800 kg（推定）

* 壺碑…みちのく（東北地方）にあるとされた大きな石碑で、平安時代以降多くの和歌に詠まれている。江戸時代以降多賀城碑が「壺碑」と考えられるようになり、松尾芭蕉も「奥の細道」の途中に立ち寄って大感激している。現在では、「壺碑」はもともと実体のないものであり、両者は同一のものではないと考えられている。

* 日本三古碑…他の二つは、那須国造碑（栃木県）と多胡碑（群馬県）。



多賀城碑覆屋 仙台伊達藩四代藩主伊達綱村の時に（1700年前後）、水戸藩主徳川光圀（水戸黄門として有名）の勧めで建築した。写真は1875年に建て替えられ、1998年に解体修理されたもの。



発掘された多賀城碑 1997年度に行われた発掘調査時の様子。碑が掘えられた地下部分の状況を確認している。

〔銘文〕

多賀城

去京一千五百里

去蝦夷国界一百廿里

去常陸国界四百十二里

去下野国界二百七十四里

去靺鞨国界三千里

西

此城神亀元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝鸞修造也

天平寶字六年十二月一日

〔訓読〕

多賀城

京を去ること一千五百里。

蝦夷の国の界を去ること一百廿里。

常陸の国の界を去ること四百十二里。

下野の国の界を去ること二百七十四里。

靺鞨の国の界を去ること三千里。

西

此の城は、神亀元年、歳は甲子に次る、按察使兼鎮守將軍・從四位上勳四等大野朝臣東人の置く所なり。天平寶字六年歳は壬寅に次る、參議・東海東山節度使・從四位上仁部省卿兼按察使・鎮守將軍藤原惠美朝臣朝鸞、修造するなり。

天平寶字六年十二月一日



多賀城碑

多賀城廃寺

多賀城の南東約 1 km の丘陵上にあります。仏教の力で東北地方の安定を図るために建てられた多賀城の付属寺院で、多賀城と同時に創建され、ほぼ同様の変遷をたどります。

塔や金堂、講堂などの配置は、大宰府*の付属寺院である観世音寺（福岡県）、多賀城の前身である郡山遺跡の付属寺院の郡山廃寺（仙台市）に似ています。

*大宰府…律令政府が九州地方の支配の拠点として設置した役所。中国や朝鮮半島との外交窓口でもあった。



多賀城廢寺伽藍模型

中門と講堂を築地塀で連結し、内部の東側に塔、西側に金堂を配置している。講堂の裏側には僧坊や楼、倉などがある。これら全体を区画する施設は見あたらない。

多賀城廃寺 整備後の航空写真。



塔

創建時は高さ1mの土壇の上に高さ1.4mの切石積基壇が築かれており、その上面に置かれた礎石と心礎^{しんそ}が今も残っている。



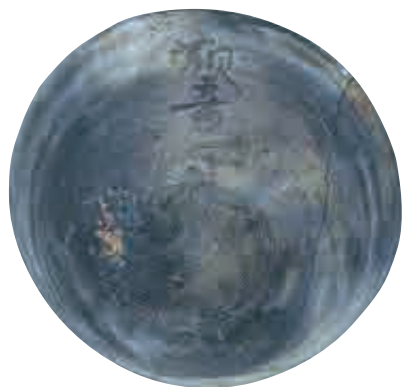
金堂

桁行5間、梁行4間の^{ひさし}四面廂付建物で、東向きの建物である。最終末の建物は桁行2間、梁行2間の東向きの小規模なものである。

多賀城廃寺から2 km 程離れた山王遺跡東町浦地区から「観音寺」と書かれた土器が見つかり、多賀城廃寺は「かんのんじ」または「かんぜおんじ」と呼ばれていたと考えられます。

塔は舍利（釈迦の骨）を納めておく寺の象徴となる高層建築物で、多賀城廃寺の塔は三層と推定されています。金堂は本尊仏が安置される寺の中心建物で、多賀城廃寺の金堂は塔の方を向いて東向きに建てられています。講堂は僧侶が勉強をする建物で、僧房は僧侶が日常生活を送る建物です。他に、時を告げる鐘を吊す鐘楼やお経を保管する経楼などがありました。

陶塔や泥塔、塔が描かれた瓦など仏教に関連する遺物が見つっています。他に、緑釉陶器や灰釉陶器、土製カマド、多量の瓦などがあります。



「観音寺」墨書土器（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）
山王遺跡東町浦地区。200 点以上の灯明皿と一緒に捨てられており、多数の灯明をともして仏を供養する万灯会に使われたものと考えられる。



泥塔
型で大量に作った小さな塔の焼き物。中にお経を収める。講堂の周辺から多量に見つかっている。



塔をヘラ書きた瓦（Ⅰ期）
五重の塔を描いたもの。瓦工人のなかには多賀城廃寺創建以前に、実際に塔を見た人がいることがわかる。



陶塔
塔のミニチュア模型の焼き物。



捨てられた大量の土器（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
高崎遺跡井戸尻地区。多賀城廃寺の南西約 500m の場所で、3 度にわたって捨てられたおよそ 2,000 点の土器が見つかった。いずれにも油煙状の付着物が残っており、万灯会に使用されたとみられる。



鬼瓦
左右ともに多賀城廃寺から出土したⅠ期のもの。左は頭部が方形で、中央に蓮花文がある。右は頭部がアーチ形で、蓮花文が4個配されている。

城外の様子

多賀城外の南側には、東西・南北大路を基準とした道路網が整備され、町並みが形成されていました。これらは時代とともにしだいに整備・拡大されたものと思われます。

南北大路は政庁南大路の延長上にあり、道幅は 18m で建設されましたが、すぐに 23m に拡幅されています。

東西大路は多賀城の外郭南辺から 550m（当時の単位で 5 町^{ちやう}）離れており、外郭南辺築地塀と平行しています。道幅は 12m 前後です。



下級役人の家 山王遺跡八幡地区。



運河 多賀城と砂押川を結ぶ大溝。



国司館 (提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター) 館前遺跡。



国司館 山王遺跡多賀前南区。遣り水の付いた庭園がある。高級な土器が多量に見つかった。



国司館
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
山王遺跡千刈田地区。



南北大路
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。道幅23m。



細長い建物
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。南北大路と平行している。

大路の間には概ね1町(110m)間隔で小路こうじがあり、道幅は3m程です。道路には側溝が付けられ、川には橋が架けられていました。また、道路だけではなく、多賀城に物資を運ぶ運河も整備されていました。

これらが本格的に整備されるのはⅢ期以降ですが、幹線道路である大路の敷設はⅡ期以前に遡ります。

道路で区切られた区画には、役人や多賀城で仕事をする人々が住んでいました。上級役人は大路の近くで広い邸宅を構えていました。邸宅では宴会が行われたらしく、食器がたくさん見つかります。一方、小路に面した小区画には下級役人やさまざまな仕事に従事する人々が住んでいました。さらに、町並みの外側には水田や畑があり、墓地もありました。

また、道路の交差点や水辺ではまじないや儀式が行われていました(→P20)。



小路の交差点
山王遺跡八幡地区。東西の小路がずれて交差する。道幅は3～5m。



南北大路に架けられた橋(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。打ち込みによる橋脚が多数あり、何度も改修されたことがわかる。



南北大路と東西大路(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。大路の交差点上空から多賀城を見る。南北大路は長さ550mの直線道路である。



宴会用の高級食器
山王遺跡多賀前地区。



宴会用の使い捨て食器
山王遺跡多賀前地区。穴を掘ってまとめて捨てられていた。

VI

関連遺跡の調査

東北地方には多賀城と密接な関連のある遺跡が多くあります（→P6）。当研究所では宮城県内の主要な関連遺跡を発掘し、貴重な成果を上げるとともに、遺跡の保存にも協力してきました。



下伊場野窯跡群
Ⅰ期の瓦を焼いた窯。



下伊場野窯跡群出土の軒瓦
(重弁蓮花文軒丸瓦/重弧文軒平瓦)



木戸窯跡群
Ⅰ期の瓦を焼いた窯。



木戸窯跡群出土の鬼瓦
頭部はアーチ形で、中央に蓮花文がみられる。



日の出山窯跡群
Ⅰ期の瓦を焼いた窯。

発掘調査を実施した遺跡

- 桃生城跡(石巻市飯野・太田)
- 伊治城跡(栗原市築館城生野)
- 名生館官衙遺跡(大崎市古川大崎)
- 東山官衙遺跡(加美郡加美町鳥嶋)
- 合戦原窯跡群(大崎市岩出山南沢)
- 下伊場野窯跡群(大崎市松山下伊場野)
- 亀岡遺跡(東松島市野蒜)
- 木戸窯跡群(大崎市田尻大嶺)
- 六月坂遺跡(大崎市田尻大嶺)
- 日の出山窯跡群(加美郡色麻町四釜)



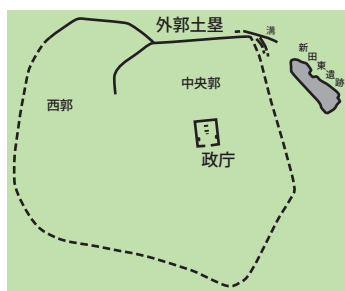
桃生城跡 (石巻市飯野・太田)

桃生地方 (宮城県北東部) の拠点として、天平宝字 3 (759) 年末に完成しました。造営の責任者は多賀城Ⅱ期の修造を行った藤原朝鸞です。

築地塀や土塁と大溝で周囲を区画し、内部を築地塀と大溝で区分しています。中央郭に東西 66m、南北 72m の方形に築地塀で区画した政庁があります。宝亀 5 (774) 年にエミシの攻撃を受け、政庁が焼かれています。



桃生城跡 (西から)
中央の小高い山が桃生城跡。政庁の周辺の丘陵上には役所がある。



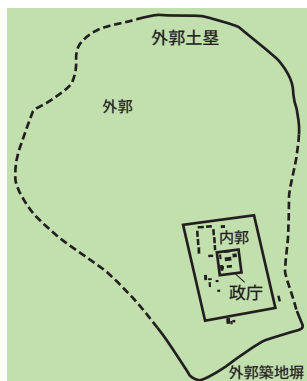
桃生城政庁に葺かれた軒瓦
(素弁蓮花文軒丸瓦/
均整唐草文軒平瓦)

桃生城跡全体模式図

国指定史跡 伊治城跡 (栗原市築館城生野)

栗原地方 (宮城県北部) の拠点として神護景雲元 (767) 年に造営されました。

築地塀や土塁、大溝で周囲を区画し、内部には長方形に区画された内郭があります。内郭の中央には東西 55m、南北 60m の方形に築



伊治城跡北辺土塁
二重の土塁と大溝で区画している。

伊治城跡全体模式図

地塀で区画された政庁が置かれています。宝亀 11 (780) 年に伊治公皆麻呂の反乱 (→ P5) の舞台となり、東北地方の最高責任者が殺されました。

平成 15 (2003) 年に国の史跡に指定され、現在も栗原市教育委員会によって継続的に発掘調査が行なわれています。

国指定史跡 東山官衙遺跡 (加美郡加美町鳥嶋)

古代の賀美郡の役所で、多賀城とほぼ同じ頃に造営されました。

周囲を築地塀と大溝で区画し、内部を大溝で東西に 2 分しています。東側には政庁、西側には正倉院が置かれていました。また、遺跡南面の段丘上にある壇の越遺跡では道路や上級役人の邸宅などが発見され、町並みが形成されていたことがわかりました。

エミシとの対立の緊張が高まった時期には、東山遺跡を中心とした広大な範囲を築地塀や材木塀、土塁と大溝で取り囲んでいます。



東山官衙遺跡群全体模式図



東山官衙遺跡 (北から)
杉に囲まれた畑が遺跡中心部の平坦面。上方に広がる水田が壇の越遺跡。



礎石式の倉庫
突き固めた基礎の上に礎石を据えている。

参考文献

概説的なもの

宮城縣 「宮城縣史 34 資料集 V 考古資料」 1981
桑原滋郎編 「多賀城跡」日本の美術 No.213 至文堂 1984
石松好雄・桑原滋郎 「古代日本を発掘する 4 大宰府と多賀城」 岩波書店 1985
渡辺信夫編 「図説 宮城県の歴史」河出書房新社 1988
工藤雅樹 「城柵と蝦夷」 ニューサイエンス社 1989
多賀城市史編纂委員会 「多賀城市史第 1・4 巻」 1997.1991
須藤隆・今泉隆雄・坪井清足編 「東北・北海道」古代の日本 9 角川書店 1992
渡辺信夫ほか 「宮城県の歴史」山川出版社 1999
宮城県教育委員会 「発掘ダイジェスト－山王・市川橋遺跡－」 1999
安倍辰夫・平川南編 「多賀城碑 その謎を解く」[増補版] 雄山閣出版 1999
熊谷公男 「古代の蝦夷と城柵」歴史文化ライブラリー 178 吉川弘文館 2004
青木和夫・岡田茂弘編 「古代を考える 多賀城と古代東北」 吉川弘文館 2006
鈴木拓也 「蝦夷と東北戦争」戦争の日本史 3 吉川弘文館 2008
高倉敏明 「多賀城跡 古代国家の東北支配の要衝」 日本の遺跡 30 同成社 2008
進藤秋輝 「古代東北統治の拠点－多賀城－」 シリーズ「遺跡を学ぶ」066 新泉社 2010
進藤秋輝ほか 「特集 多賀城発掘 50 年」 月刊考古学ジャーナル 9 月号 No.604 ニューサイエンス社 2010
進藤秋輝編 「東北の古代遺跡 城柵・官衙と寺院」高志書院 2010
熊谷公男編 「蝦夷と城柵の時代」 東北の古代史 3 吉川弘文館 2015
鈴木拓也編 「三十八年戦争と蝦夷政策の転換」 東北の古代史 4 吉川弘文館 2016

展示解説書

東北歴史資料館
「多賀城と大宰府」 1989
東北歴史資料館・多賀城跡調査研究所
「多賀城と古代日本」 1975
「発掘された古代の東北」 1979
「多賀城と古代東北」 1985
東北歴史博物館
「展示案内」 1999
「文字世界への招待」 2001
「ふるきいしづみ」 2001
「東北発掘ものがたり」 2002
「多賀城・大宰府と古代の都」 2010
「蝦夷－古代エミシと律令国家」 2019
多賀城市埋蔵文化財調査センター
「多賀城周辺を掘る！－多賀城とともに生きた人々のくらしを探る－」 1987
「常設展示解説書」 1988
「柏木遺跡－古代の鉄生産をさぐる－」 1988
「墨書土器 観音寺の謎－多賀城廃寺の寺名をさぐる－」 1989
「多賀城碑－今、まさによみがえる－」 1990
「山王遺跡」 1993
「国守館－王朝時代の多賀城」 1994
「いにしえびとの祈り－村の祭祀から国府の祭祀へ－」 1995
「城柵の時代－律令制下の東北－」 1996
「陸奥・出羽と北方世界の産物」 1999
「漆紙文書に見る古代東北」 2000
「いにしえの多賀城びと－古代都市でのくらしぶり」 2001
「古代都市 多賀城」 2002
「市川橋遺跡出土横笛－古代の横笛－」 2003
「街道点描－古代のみち、中世のみち」 2004
「大宰府と多賀城－西と東の古代都市－」 2006
「多賀城碑－いしづみが語るもの－」 2008
「古代都市多賀城－地下に埋もれた地方都市－」 2010
「多賀城跡の保存と研究－ 150 年の軌跡－」 2016
「多賀国府－古代の多賀城から中世の府中へ－」 2017
「古代の多賀城と国司館」 2018
地底の森ミュージアム
「陸奥国大戦争時代－蝦夷と移民－」 2008

本書の作成に際し、下記の機関にご協力を賜りました。
心よりお礼申し上げます。

秋田市教育委員会 秋田市立秋田城跡歴史資料館 盛岡市教育委員会
栗原市教育委員会 仙台市教育委員会 多賀城市教育委員会
多賀城市埋蔵文化財調査センター 七ヶ浜町教育委員会
東北大学大学院文学研究科 鼻節神社
宮城県教育委員会 東北歴史博物館

**宮城県多賀城跡調査研究所設立 50 周年記念
多賀城跡 ー発掘のあゆみ 2020ー**

発行日 令和 2 年 3 月 25 日
編集・発行 宮城県多賀城跡調査研究所
〒 985-0862 宮城県多賀城市高崎 1-22-1
TEL 022 (368) 0102

印刷 今野印刷株式会社
〒 984-0011 宮城県仙台市若林区六丁の目西町 2-10
TEL 022 (288) 6123